

# 安楽寺の仏像

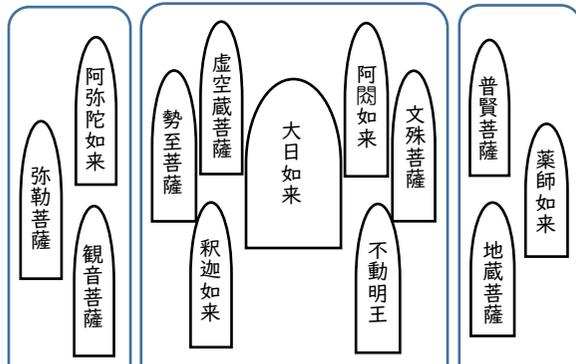
～木造薬師如来坐像・円空作菩薩形坐像・十三仏龕～



## じゅうさんぶつがん 十三仏龕

龕とは仏像や経文を安置するために壁面や塔内に設けられた小室のことだが、観音開きとなる厨子の内部に仏像を彫るものもそう呼ばれる。高野山金剛峯寺の国宝「諸尊仏龕」は、空海が唐から持ち帰ったものという。

安楽寺の十三仏龕は、住職の福澤氏の発願で昭和24年に奉納されたもので、篠津の立川金禄氏の手になるものである。樟の一木を用いたもので、金剛界の大日如来を主尊とする真言様式の十三仏である。中央に七尊、左右の扉に三尊ずつ合計十三尊で、瑞雲に乗る白木作りである。剣や蓮華などの持物は別に作り差し込まれている。



地域の文化財を地域の手で守る 2

## 安楽寺の仏像

～木造薬師如来坐像・円空作菩薩形坐像・十三仏龕～

企画制作：白岡遺産保存活用市民会議 監修：白岡市教育委員会教育部生涯学習課文化財保護担当  
協力：朝日山安楽寺

〒349-0292 白岡市千駄野 432 白岡市教育委員会教育部生涯学習課

電話 0480-92-1111 内線 522 E-mail: syougaiakusyu@city.shiraoka.lg.jp

URL: [www.city.shiraoka.lg.jp/kanko\\_bunka\\_sports/rekishibunkazai/index.html](http://www.city.shiraoka.lg.jp/kanko_bunka_sports/rekishibunkazai/index.html)



安楽寺・白岡市教育委員会・  
白岡遺産保存活用市民会議



**もくぞうやくしによらいざぞう**  
**木造薬師如来坐像**  
 よせきづく ぎよくかん かんじゆう  
 寄木造りで玉眼を嵌入する。頭体幹部は前後2材、頭部前面と胸部までを1材で作り襟際で割首、背面材は後ろ襟首で割首とする。肉髻を施す。肉髻・頂部別材。肉髻珠は木製朱彩とし、白毫は水晶製。左手に持つ薬壺は後補である。

体部は損傷が激しかったといい、昭和57年に篠津の仏師で彫刻家であった立川金祿氏によって修復された。胸板内面には「応仁二(1468)年戊子 祐榮 再興修理年代之事 天和三(1683)癸亥年慶傳法印代 朝日山本堂本尊薬師如来 弘法大師御作 明和三(1766)丙戌載(歳)四月含光法印代」との墨書が認められる。



**えんくうさくぼさつぎょうざぞう**  
**円空作菩薩形坐像**  
 円空は、江戸時代の前期に美濃国（現在の岐阜県）に生まれた僧で、各地を巡り歩き行く先々で木切れを素材とした独特の作風の仏像や神像を残したことで知られている。

埼玉県は、岐阜県愛知県に次いで多くの作品が確認されている。中でも白岡市をはじめ、蓮田市、春日部市、宮代町など東部地域に多く残されており、日光とつながる街道筋とのかかわりが注目されてきた。

安楽寺に伝えられている菩薩形坐像は、当地域に特徴的にみられる20cmに満たない小像群のうちの一つで、安楽寺寺須弥壇から発見されたものである。

頭部から白衣を被り、規則正しく衣文の刻まれた衲衣を通肩にまとい蓮台上に坐す小像である。背面中央には、3本の衣文線が斜めに刻まれる。

手入れの行き届いた漆黒の木肌から慈愛に満ちたぬくもりを感じる。よくなでられ、顔面の彫りにも磨耗が認められるが、口元には優しい笑みをたたえ、円空仏の特徴の一つである「微笑み」がよく現れている。

本像の背面に墨書の痕跡があることが知られていたが判読できなかった。令和5年度の仏像調査の折、背面を赤外線カメラで撮影したところ、背面全面に梵字があることが確認できた。擦れて薄くなっている部分もあり、判然としないものの、9文字ないし13文字がかかっていることがわかる。

